

五十嵐 仁著

『この目で見えてきた世界の
レイバー・アーカイヴス』地球一周：労働組合と
労働資料館を訪ねる旅』

評者：戸塚 秀夫

はじめに

この本は並のスタイルの書評にはなじまない。著者五十嵐仁氏は、大原社会問題研究所の専任教授で、これまで現代日本の政治について数多くの書物を公にしてきただけでなく、日本の社会・労働運動の歴史事典などの編集にも関与してきた方。つまり、私の既成観念では、日本についての政治学者であり、社会・労働運動史家である。その五十嵐氏が一念発起というか、2000年9月から約1年半の在外研修の機会を生かして、労働組合や労働資料館を訪ねての「地球一周の旅」に出た。その旅行記、体験記を日誌風にまとめたのがこの本である。当然、組合や資料館以外の話もたくさん含まれているが、欧米を中心に世界の主だった労働組合や労働資料館を訪ねてみたい、それが「長年の夢」だった、というのである。

英語が苦手であったと自称する五十嵐氏がこの「夢」を独りで、つまり、通訳もガイドも雇わずに実現するまでには、それなりの緊張と準備が必要であった。ハーバード大学に留学した前半の一年間で、基礎的な英会話力を身につけて、インタビューを重ねる旅に出たというのであるから、まずはその努力と度胸に敬意を表したい。せっかくの海外留学の機会を与えられながら、外国の研究者や労働者たちと深く交流

できないままに帰国する大学の先生方の「留学」話に、たびたびうんざりしてきた私にとって、この本は一服の清涼剤となった。今の大学にも、こういう方がいるのだ、という発見である。

読後感を一言で言うと、この本は五十嵐氏が念願としていたテーマに関する予備調査レポートのようなもの、あるいはのちに続く人々へのガイド・ブックのようなものである。そこから何を学べるか、という観点で、以下、若干の感想を書きとめて責めをふさぐことにする。

1) 労働組合についての観察

この書物には、五十嵐氏が訪れた労働組合についての観察と、労働資料館についての観察が含まれている。

訪問先は「序章」に記載されているが、組合については、主に各国のナショナル・センターに接近してその国の労働運動の概観を得ようとしている。五十嵐氏はそこで、各国の運動の「個性」に注目しながらも、当面している課題には「驚くほどの共通性」があったと総括している。「異口同音に」語られたのが、「新自由主義的攻勢への対抗」であり、「民営化やアウトソーシングへの抵抗」であった、というのである。

この辺のことは、大方の予想通りというべきか。私が興味を持ったのは、次の二点である。一つは、そのような対抗運動が欧米では労働運動の「新たな高揚」に向かっているのではないか、という指摘。その印象は、ただ単に組合役員とのインタビューで固められたというよりは、旅先でぶつかった座り込みやストライキ、あるいはデモ行進に接する中で固められている。いま一つは、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなど、北欧諸国における労働組合の社会的影響力の強さ。その根拠に探りを入れようとしたインタビューでのやり

とりである。同じ経済的不況に直面しても、労働運動の側での主体的な取り組み方いかん、その政策的イニシアチブいかんによって、組合の影響力を維持ないし強化することも可能ではないか。五十嵐氏はそういう仮説を書き留めたかったのかもしれない。

いうまでもなく、こういった指摘は、ふがいない日本の労働運動の現状への批判につながっている。それだけに、それぞれ各国の運動の「個性」に立ち込んだ考察が求められるであろう。それは、ナショナル・センターの動きを追うだけでは到底解けないテーマであるに違いない。ここからどんな調査研究に向かうべきか。そういった課題が浮上してくるレポートである。

2) 労働資料館についての観察

他方、労働資料館についての観察は、五十嵐氏の勤務先、大原社研での経験が生かされているのであろう、訪問先の諸機関の特徴をかなり詳しく伝えている。もちろん、昨今の情報技術を前提にすれば、諸機関のホーム・ページにアクセスすることによって、概略的な情報を入手することは容易であろう。だが、この書物には、訪問先の諸施設だけでなく、その運営の実態、資料整理・保管の現場にまで立ち込んだ観察のレポートが収められている。五十嵐氏を迎えたアーキビストやライブラリアンたちの写真が載っており、その肉声も伝わってくるような、臨場感あふれるものとなっている。

私もかつてこの中の2、3の施設を訪れたことがあるが、それは当時の調査研究に関連する資料を読むため、資料館自体を理解しようとするものではなかった。五十嵐氏の観察から得られる第一の印象は、各国における労働資料館の在り方は、それぞれの国における労働組合や労働運動の社会的認知・記憶の度合いと仕組み

を表現している、ということである。先に触れたように、五十嵐氏は欧米における労働運動の新たな高揚への動きを直感しておられるが、それを支える社会的インフラストラクチャーの一つに、こういった労働資料館の存在がある、といえるのではないか。

五十嵐氏は、ヨーロッパ各国には労働組合や労働運動についての博物館があり、そこで労働と産業や生活をテーマにして、労働者や労働組合・社会主義運動の展示などが行われていることに驚いた、と記している。日本にはこんな博物館があるだろうか、と問うている。絶無ではないと思うが、おそらくそのスケールは段違いなのであろう。さらに、各国の労働組合がそれぞれの資料館や文書館を持っていたり、労働関係研究所や資料館との緊密な連絡のもとに運動の記録を残すことに努めていたりすることに注目し、その点でも日本の組合の取り組みはあまりに貧弱ではないか、と問うている。「そもそも、自分の組合の資料を歴史的な文書として大切に保存し、そこから経験や教訓を学ぼうとする意欲がどれだけあるのだろうか。」という五十嵐氏の問いかけは、深刻な意味を持っているように思う。では、どうしたらよいのか。どこから手をつけるべきか。そういった問題意識が強まるレポートである。

一つだけ注文めいた希望を付け加えるならば、五十嵐氏が取り上げた労働資料館が、労働者教育活動にどのように関与しているのか、といった問題があるのではないかと、ということである。たとえば、ジョージ・ミーニー・センターは、労働組合の資料保管庫であるだけでなく、労働者教育・研修の機関でもある。フンボルト財団も両分野に手を広げていることは知られている。資料館が抱えている研究者肌の方々が、労働者教育プログラムにどう関わっているのか。私はその辺のことに関心を持つ。

おわりに

ここで白状しなければならぬが、私はこれまで五十嵐氏の著作の熱心な読者ではなかった。せっかくいただいた本でも、最後まで精読したものはほとんどなかった。不勉強だったのである。この本は思わず引き込まれて読み終えた。そういう魅力がこの本にはある。

何故か。もちろん、「世界一周の航空券」を入手して世界各地の組合や労働資料館を訪ねる、という奇想天外な計画に驚き、その冒険の成り行きを見届けてみたい、という野次馬根性もあった。だが、それだけではない。読み始めてみると、旅行者自身の率直で明るい人柄と、歴史的な観察や反省の言葉にひかれるところがあって、つまり、著者五十嵐氏自身への興味がわいてきて中断できなかつた、というのが実のところである。

五十嵐氏が大原社研の教授であるということが、各国の労働資料館への接近を容易にしたという面もあるには違いないが、この調査旅行の成功は五十嵐氏自身の人柄によるところが大きいのではないかと。言葉の問題もあって、外国人ばかりの研究集会などではとかく尻込みしてしまう日本人が多いが、五十嵐氏はご自分の関心を包みかくさずに大胆に発言する。それによって知己を広げていく。実に積極的である。また、この旅行記では、ご自身についての反省の言葉がたびたび記されている。ベルリンに足を運んだ時に、かつて東独を支持していた自分を思い起こして、「私の手も汚れているのだ」と書き留めているあたりは、とりわけ印象的である。

というわけで、この書物は、ただ単に外国の諸機関の観察記録であるだけでなく、その旅行を通して自分のアイデンティティーを確かめようとしている一人の研究者の内面をのぞかせて

くれる。とても面白い本である。

だが最後に、高齢者の特権として苦言を呈したい。それは、五十嵐氏の調査スケジュールがタイトにすぎないかということである。多少訪問先を減らしてでも、じっくりとインタビューして収集データを読み込み、考えるという時間をもっと持つべきではなかつたか。それはエネルギーギッシュに歩き回る五十嵐氏の調査旅行にはそぐわないのかもしれないが。

あるいはそのことと関連しているのであろうか。この書物にはいくつかの気になる誤植がある。おそらく多忙なスケジュールをこなしながら作られた日誌風のメモが、そのまま利用されたのであろう。それを別にしても、明らかな誤解も記されている。UAWのW. ルーサー会長が「AFL・CIOのミーニー会長との対立から68年に脱退し、チームスターズとともに新しい労組を結成した」とあるが、脱退してつくられたのは「新しい組合」ではなく、チームスターズなどと特定の共同行動を追求しようとしたAlliance for Labor Actionであった。AFL・CIOに対抗する潮流の結集に乗り出したが、それも実らなかつたというのが史実である。これはルーサー記念図書館の解説の中に出てくるので、小さくない誤解として指摘せざるを得ない。

だが、重ねて強調しておきたいが、本書の価値はそういうことによって損なわれるものではない。とりわけ海外に出かける労働関係の方々にはとても役に立つはずの本である。
(2005.1.1 脱稿)

(五十嵐仁著『この目で見てきた世界のレイバー・アーカイヴス 地球一周：労働組合と労働資料館を訪ねる旅』法律文化社、2004年9月、ix + 439頁、定価4,700円 + 税)

(とつか・ひでお 国際労働研究センター顧問)